

第六十三回 桐の花賞

まつした
松下 誠一 (東京)

右に贈ることを決定した

令和八年五月

コスモス短歌会

松下誠一の作品について

松下誠一さんは二十代の作者。作歌歴は五年に満たないというものの二〇二三年一月の「コスモス」入会以来、特選回数が多さや応募した〇先生賞において佳作や優秀作品に選ばれるなど実力ある作者として注目されている。

○ニンニクの芽とレバーが熱に絡まるを客がひとりの中華屋に聴く
○夜学から帰る電車に目を瞑る 味のぼやけたガム噛みながら

松下さんの特徴の一つとしてしっかりと場面設定の下で描かれる作品世界が挙げられる。「中華屋」「夜学」という喚起力の強い言葉を核として背景の物語がリアルな手触りで立ち上がってくる。一首目は、町中華の店内のにおいと音と熱さが読み手の五感を刺激し主人公の内面にまで想像が及ぶ。

二首目は「味のぼやけたガム」の味覚から浮かぶ疲労感が、一首に陰翳を生み読者の想像を広げる。

○ぼろぼろのじてんしゃ雨に晒されて、その形に沈む秋草

○春風が霧をうごかすことはなく霧のなから春風の吹く

放置された自転車。吹いてくる春風。見知らぬ景が作者の手に掛かると初めての景のような新鮮さで見えてくる。「自転車の形に沈む秋草」「霧のなから春風が吹く」という発見は観察眼の鋭さに止まらず新たな認識が促されるようである。

○僕の詩にあるいは君のスケッチにあんずの花のうすく赤らむ

○合鍵をくれるほどではないきみの住むマンションのピンポンを押す
○換気扇の下で体を近づけてあなたと僕の煙が混じる

相聞の瑞々としたリアルにも惹かれる。「あんずの花」に象徴される初々しい恋が繊細で美しい一首目。二首目は「合鍵をくれるほどではない」という距離感が二人の関係性を暗示する。どこか倦怠感の漂う三首目は映画の一場面のように読者を立ち止まらせる。抽出が叶わなかったが句跨りが内在的なリズムを作っている若者らしい言葉遣いも松下作品の魅力である。

松下さんの歌からは「青春性」という言葉が思い浮かぶ。爽やかさや明るさだけではない混沌とした生の感触のようなもの、光と翳が同居しているような抒情。松下さんがこれから生み出す作品に読者として大きな期待を寄せている。

《選考過程》

選者団に推薦を求め、高野・影山・桑原・狩野・小島ゆ・木畑・大松・田宮・津金・福士・藤野・風間・田中・水上比・鈴木竹・原賀・水上美・大野・松尾・鈴木千・小島な・

小田部・斉藤の各氏から回答があった。

話し、得点の最も多い松下誠一の受賞が決定した。

松下誠一33点、山添聖子21点、清水美里11点、宮梓一10点、谷川恵9点、尾花照子5点、岩館澄江5点、瀬尾恵4点、青野恵子4点。
この数字をもとに二月十四日、編集部で検

作品抄

水際にひとり丸まる朝方を遠くに三基あるガスタンク

卓上の瓶に挿されるケイトウは母と住んでるから見れた花

瓶のふちに接する点を持ちながらさらに傾く茎というもの

灰皿に氷はじつと溶けてゆく煙のなかの秋の円卓

無音にはなることのない闇に居て水面になにか跳ねた気がする

無気力を花に与えているようでふたたび秋の土手をふらつく

わるい夢の途切れてからはつま先の温まらなさばかりを思う

よわい葉を風はつたつてゆきながら安定剤を舌の根に置く

ぼさぼさの髪は煩わしい視野に夕闇の水面を入れておく

フクロウでさえも迷子になるような真夜中をあなたと目をつむる

オリオン座以外になにか知ってたらもうすこし続いていた会話

白百合がふちから枯れている街のはずれに送電線はたわんで

青草の蒸れたたにおいのする橋の柵に凭れていれば日の暮れ

竹の葉は僕の頭上にこすれあい活力のない冬を奏でる

面会の三十分にはあちゃんは何度かむせて目はひらかなない

寂しさを言ってしまう冬はじつと見る砂時計のおそさ

寒いのがうれい鳥の一種かのように喫煙者たちは外へ



葉の揺れがそのまま胸に移りくる広場の椅子に座ってあれば木のつくる闇と夜空の闇がありその境目に葉の揺れている体重の減りゆく春よ惜しみなく菜の花の咲く公園にいて魚の目に鈍い痛みはありながら街を濡らしている春の雨喋らないことが得意なきみと居て小さな花に寄る冬の蜂山道に視界の晴れる場所がありそのときに見つけた藤の花霧に濡れて榛名湖へ降る陽光のあなたが帰ると言ったら帰る春風が霧をうごかすことはなく霧のなかから春風の吹く見えるところに小魚はいて水底に俊敏な影ひとつ踊らす湖のスワンボートはさざなみに重い体をわずかに揺らす蘭の咲く熱帯館をきみとまわる午後ゆるやかに半袖になる僕の詩にあるいはきみのスケッチにあんずの花のうすく赤らむ初恋を忘れるようなひと夏の線香花火垂らす束の間

感想

この度は、第六十三回桐の花賞に選考頂きありがとうございます。結社内においては全くの若手ではありますが、人並みに焦りもあり、算段の無さゆえに膨らんでいた期待感が見聞によって萎んでしまうのは寂しくもありました。賞のための歌作ではありませんが、二十二歳の一年間が、ひいてはこれまでの生活がいくらかでも報われたように思います。

選者の皆さま、編集委員の皆さま、本当にありが

とうございました。コクーンの会の皆さま、早稲田短歌会とひねもす同人の皆様、そして奥村晃作さん心から感謝を申し上げます。今後、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

略歴

二〇〇二年 東京都板橋区生まれ
二〇二一年 早稲田短歌会入会
二〇二三年 コスモス短歌会入会

同年 第六十六回短歌研究新人賞最終候補

第六十三回 桐の花賞選考資料抜粋

本年度桐の花賞の選考のもととなった推薦文と作品の一部を、ここに掲載する。推薦作品抄は、推薦者の挙げた作品の中から編集部が適宜抄出したが、推薦の多い作品を初めのほうに掲載してある。

推薦作品抄

山添 聖子 *

ご機嫌はひなたのソフトクリームの速さで崩れるきょうだいげんかなめらかなリボンをなびかせるようにインヒョドリのさえずる五月カルピスの薄まっていくより早く仲直りするきょうだいげんかケーキ屋にポワソンダブリル並びたり四月の嘘はさかなのかたちビクターの犬の角度で聞いている夏の課題の子のリコーダー「たたいま」は塩素の匂い濡れ髪の子とそうめんを食べる八月幻肢痛かもしれない腰痛のときはしつぽを思い出してるオーロラの歌も星座のつぶやきも受信しているヘラジカの角キヤラバンのようにたくさん荷物持ち子ら帰り来る七月の道この夏の熱を冷ましていくように九月のアイスティー結露するドアノブにスーパーボールの畏のあるクリスマススイブの夜の静けさ理科室でうどんを食べる先生の顔を見に行く春の参観病院の廊下をギブスの子と歩くヴァージンロードすすむ速さで教室の窓辺のひかり思い出す国語便覧繰るとききの風孫悟空の輪っかの形してるからまだ馴染めないネットクレーラー

1位 松下 誠一 A・

清新な相聞歌が魅力。その評論「リアルな感覚」にあるように、リアルな現代の生活感を伴いつつ、普遍的な恋愛感情がみずみずしい。

2位 山添 聖子

一定の距離をおきつつ子らを見守る母としての濃やかな視線に愛情がある。一方でロマンあふれる壮大な発想の歌も魅力的。3位 谷川 恵 些細な日常の中から、孤独な影をともしなう詩を生み出す。病床の父を見守る視線も冷静で、抑制された感情から詩が生れてくる。

1位 松下 誠一 B・

沈黙と逡巡が滲む文体が作者の個性。直接感情を語らず、景に仮託する手法によって読者との絶妙な距離感を創出している。

2位 山添 聖子

子どもとの暮らしの端々を生きたきと詠む。身体感覚に由来

するユーモアと詩情が作者の持ち味。韻律も伸びやかで印象に残る。

3位 青野 恵子

自身の中にある過剰さをうまく活かした作品に注目した。特に相聞歌は作者の個性が凝縮され、思いの強度が結晶化しているようで興味深かった。

1位 松下 誠一 C・

描写の優れた歌があり、対象である自然と一体となるような感覚の歌がある。一つの場面を提示して、読者にその場面の映像を思い描かせる力がある。

2位 谷川 恵

作者は、身の回りに生まれた小さな波から得た感覚を、自身の感性を通して提示する。その感性から生まれた作品には多くの人を納得させる力がある。

3位 山添 聖子

比喩表現に長けた作者であり、入会以来、優れた作品を発表している。子どもをはじめ、さまざまな事物への温かい眼差しが

心地よい。

D・

1位 松下 誠一
どの歌にも静謐感が漂っていて、独自の歌の境地をつくりあげている。孤独な自身をみつめる歌、「あなた」と自身との関係性を確かめる歌に惹かれた。

2位 宮 梓一
口語の歌ではあるが、韻律にこだわって詠んでいるところが評価できる。また日々成長する子供へのまなざしは優しく、印象深く詠んでいる。

3位 岩館 澄江
口語を生かした軽やかなリズムの短歌が印象深い。生き物に対する独自のまなざしを感じさせる歌が多くなり、持ち味として評価できる。

E・

1位 松下 誠一
言葉にはしないで来たところ。松下さんの作品は、その心を詠んだ歌だ。短歌でしか詠えない言葉に充ちていて、心理と景のバランスが素晴らしい。

2位 山添 聖子
山添さんは喩の達人である。直喩隠喩にあふれているが、歌の姿が端整で喩の多さを個性としてしまう力量だ。すべての原動力の家族への愛も好ましい。

3位 谷川 恵
対象への態度がやわらかく、韻律もやさしい。何かを手放した作者なのか欠落感があるのだが、詩が良質で、誠実な繊細な

歌にこころ惹かれる。

F・

1位 松下 誠一
孤独、恋、家族を詠む。文体に破綻はなく、決して若さになつ走らないどこか遠観したような冷静さが独自の世界観を作り出している。

2位 谷川 恵
さびしさ、孤独と向き合う繊細な感情の揺れを自然に託しドラマがある。余韻の残る詠みである。

3位 山添 聖子
子ども達との日常を端正で無理のない比喩を用いて愛に溢れる。文体も完成されている実力の持ち主。

G・

1位 松下 誠一
「青春性」という言葉が思い浮かぶ作品群。相聞歌でも自己省察の歌でも切り取られた場面から背景の陰翳を帯びた物語が立ち上がって来る。韻律も魅力的だ。

2位 山添 聖子
子どもとのさりげない日常が詩情豊かに掬われている。直喩や薄明喩などの様々な比喩に引き寄せられ、ある日ある時が生き生きと再現されている。

3位 宮 梓一
父として夫として等身大の伸びやかな作風が魅力。対象に注ぐ眼差しがやさしい。現代の父親のジェンダーの視点から詠まれた歌にも注目した。

溶け出したストレスが目立たないように入浴剤はにがり湯にする
鳩尾に誰もが白き鳩を飼うから冬空に平和を祈る
消しゴムを忘れて行った子の今日が間違いない少なき日でありますよう

清水 美里 *

シャンブーに汗のにおいの混ざる午後汗の部分がわたくしである
命にはならないことを決められていて痛いほど冷えた鶏卵
家のこと何もしないとなじられてこの弁当は目に入らぬか
地下鉄のホームの椅子で泣いているひとの背中に触れたい しない
あつたかいないのがつらいががんばれなく自販機くらい優しくあれよ
絶対の外に出ないという覚悟わけのわからん靴下を履く
使わなくなつて静物画と化した石鹼今日は陰がやや濃い
爪伸びた分を成長するでなしギャング映画を流し見ている
バス停を教わったけど乗りません徒歩は情緒の乗り物なれば
後ろ手にゴツホの黄色隠し持ち「元気ですか」はただの挨拶
何してた?何しなかった?いえ何も。歯ばかり磨いていた気がする日
思春期の春はあけほの次々とほころんでゆく面疱の花
名前から忘れるのだなもういない人たちの顔いくつかおもう
飽きるつてわかつたうえでやっている今は楽しいばかりの遊び
花咲かぬ春のふつかめわたくしは全部の糸が絡まっている
眼球を外気にさらすどうせなら行きとは違う道で帰ろう

宮 梓一 *

登園の前にバックル締めるたび小声で言ってしまう「変身!」
我が家では絶滅をしたホタル族をして家飲み赤鬼も消ゆ
終わらない資料を抱え土曜朝九時ひとり食むマックグリドル
汚れたる自分の靴を洗うのは明日明後日いいや来年

1位 松下 誠一
微細な感覚の揺れや襲をしなやかに表現の力で握りこみ、独自の詩情と文体をすでに獲得している。

2位 山添 聖子
子育ての時間を通じて描き出される日常の綾。ふかぶかと慈しみ深い今へのまなざしに心惹かれる。

3位 岩館 澄江
地上からすこし浮いた場所から物事を見つめるような淡々としたユーモア。一首の独創的な着地点が癖になる。

1位 山添 聖子
歌のかたちが乱れることがない。さりげない家族詠の中にハツとするような詩の言葉やすぐれた比喩が用いられており、自然詠も伸びやかである。

2位 松下 誠一
静かで内省的な歌が多いが、闇を詠んでなお明るさがある。対象と同一化するような自然詠や、緩やかな他者との結びつきが心に残る。

3位 瀬尾 恵
軽みのある歌が魅力的である。さりげない日常を切り取る視点に独自性が感じられ、それが歌に奥行きを深さもたらしているように思う。

1位 山添 聖子
身近なものが兄弟喧嘩の本質

をつく譬えとなっている。当たり前としてそこにある物であっても、掬い方によって面白い比喻の種となることを示す。

2位 松下 誠一
繊細な感覚の持ち主である。細やかな観察の結果を歌に生かす力がある。君に対する思いの表現は自分の心の襲を、子細に観察した結果に違いない。

3位 谷川 恵
身近な暮らしにひそむ変化を見逃さない。その変化から生まれるちぐはぐな感じをすかさず掬い取る。細やかで温かい注意力があるからだ。

1位 山添 聖子
昨年の入会後すべて特選に続き、今年は十一回特選。歌の調べが良く素材が豊富。子どもの成長が歌から伝わり、母としての深い眼差しが感じられる。

2位 松下 誠一
特選十一回。二十代の学生の若い感性が光る。恋の歌、母や祖母など家族を詠む時の命を見つめる視線も惹かれる。

3位 尾花 照子
表現に工夫が見られ、比喩やオノマトベなど先人の歌を学び取り入れようとしている。

1位 清水 美里
視線は自己に強く向かっていて、自己愛や自己否定に溺れず、外界を詠うことで自己を照射する把握力、イメージ喚起力

子の髪を切ればそこから嬰兒がはらりはらりと幼児になる

マキロンをかけるほどではない傷の傘さすほどでない雨のごとワンオベの妻がいるので早退しいい夫だと言われましたが

気の抜けた古いビールへ映り込む茜色ごとひといきに呑む

そういえば父は泣かない人でしたそういえばもう父でした、僕

いつのまに紅葉は燃えていつのまに子どもは秒でずり這いをする

手の甲へ油性で書いたはずのメモ午後五時半にもう消えている

ひといきに酒を呷れば火を抱いて廻り続けるぼくは惑星

「たかひを終りたる身を遊ばせ」で子どもは飽きて積み木へ向かう

耳慣れぬ発車メロデーここはもう息子のための吉祥寺駅

谷川 恵

ぶだうぶだう ひとつぶもげばひとつぶん遠ざかりゆく秋の鈴の音

東京に初雪が降る東京はいちばんとほい雪国になる
横たはる夜の小部屋はまだ暑し虫のみ秋を知つてゐるらし
柿ひとつと桃はふたつを食べ終へしわたしのなかに木枯らしは吹く
白胡麻は真砂のごとき和へ衣。キッチンに波音を呼び寄す
点滴をされつつ父の目はひらくアームンドのごとまあるくひらく
雪よりも白いものしか言はないでしりとりをする 最初はひかり
ひとさじの白桃すくふ 真夏日の母の最後のひとさじも、桃
右脚にほのやはらかき気配して目をやればみどりごのあぶあぶ
古猫はわが家に居らず古猫のやうに息する古ヴァイオリン
あきかぜに祈りたいからあきかぜを待つてをります小さな窓辺
わたくしの四パーセントを過ごしたるだけのあの街 また夢にみる

尾花 照子 *

地下鉄の車窓にうつるぼくたちに液化した灯はながれつづける

が魅力的だ。
2位 松下 誠一

日常の小さな一片をイメージ鮮明に描き、読者にその奥のものを感じさせる技がある。定型を破ろうとしつつ野放図には破らないパラノスタがよい。

3位 瀬尾 恵

鳥取という地方暮らしを写実的に詠み、自己に閉じず、視線は時間的にも空間的にも遠く及んで広い。また、方言や韓国語などへの関心が歌を豊かにしている。

1位 清水 美里

独特の感覚、この人にしか気付けないものを、肯定的に的確な言葉で表現している。自己とことん追究して、今を生きる痛みを伝える作品にも注目する。

2位 谷川 恵

表面だけで詠む対象を捉えずに、その深部まで見つめている。柔軟性のある心から生まれる言葉には、生の温みがあり、実感がある。韻律も良い。

3位 尾花 照子

時間の流れを詠む作品に惹かれる。存在を見て感受したことを、迷いなく表現する独自の感性に注目した。硬質な詩情があり、慎重に言葉を選び定型におさめている。

1位 清水 美里

微妙な心の揺れを軽い詠みぶりで表現する。力は抜けている

が言葉選びはよく考えられたものだ。どんな歌を詠むかわくわくさせられる。

2位 瀬尾 恵

日常に題材を見つけユーモアと自虐を独自の視点で詠む。韻律や表記に工夫が見られ、より良い歌を詠もうという意欲が窺える。

3位 宮 梓一

子どもがいる日常を、ユーモラスに描く。それは時に自虐的で、時に叙情的で読者を飽きさせない。言葉は平明で内容が深い。

1位 宮 梓一

身の回りの素材を、軽快なタッチで、パワフルに、ストレートに、歯切れよく詠む。営業の仕事関係の歌、育児の歌に佳品が多かった。

2位 尾花 照子

文語、和語を巧みに使いこなし、言葉の調べが美しい。比喩の使い方もうまく、日常の景物が詩的な光彩をまとうて立ち上がってくる。

3位 松下 誠一

夜学に通う青年。やや内向的でアンニュイな雰囲気漂う。恋の歌が多く、場面からして淡い内容ばかりではないが、清新な印象を受けた。

飛行機をわたし終えたるゆうぞらはスケートリンクのように傷めり死者たちがはなびらとなりロンドする無声映画の中にたたくむガードレールのオロナミンCその底へ今日の夕陽は重なりゆけりゆうやみの街川みればおたちの声は葉のごと繁りゆきたりゆうぐれに友をよびとめ少年はどんぐりひとつ手わたしておりあわゆきのゆうべの町をらんらんとタイヤはずませゆく灯油売り名月の舞楽はおわり暗闇に職員ふたり真座を巻きおき

岩館 澄江 *

やどかりを宿からひっぱり出したとき出るにゆるりらのせつなさを見るおうちからひっぱり出されたときに出てしまつたの細いにゆるりらたまに会う実家の犬がかわいくてかわいくてせつなくてめんどうこの国の拍とわたしの韻律が合わなくていま桃が食べたい友だちはわたしに興味ないようであつたしもなくでそれでおしまい柿の実をたべて汚れたくちばしを枝にすりつけすりつけきれいわからずに黙つてるのかもしかしてせんぶぜんぶわかつてるのか

瀬尾 恵 *

ゆでたまご剥く手抄る「ウリ・ミンジュジュイ」と人、人、人練り歩くテキトーにがんばつペーと母が言う「んだな」と塗りこむハンドクリームヒトならば二百歳ほどSANTYO製センタータッキさんの二十六年

青野 恵子 *

八割の笑顔でいいと言われてもニツカリ笑うアケビの真心君の右のかかとの骨がオパールになつても見つける未来で会える夏服に活版印刷のごと残るはつ恋を君は読めるだろうか